

良賁の生涯及び不空三蔵との関係について

山口 史 恭

はじめに

唐の良賁^び（七一七―七七七）は性相学を得意とした法相系^{（１）}の僧とされ、不空三蔵訳『仁王護国般若波羅蜜多經』（以降「新訳」と称す）の訳經への参加や、自身による『仁王護国般若波羅蜜多經疏』七卷（以降良賁疏と称す）の撰述などで著名だが、特に本朝の真言宗では、弘法大師が主著『十住心論』で長々と引用している『凡聖界地章』の編著者としても知られている。従来その『凡聖界地章』二卷は刊行されていなかったが、今般、筆者も参加している大正大学綜合仏教研究所所属の「凡聖界地章翻刻研究会」（代表 橘信雄）によって、翻刻校訂が進められている。^{（２）}その内容は近年停滞している良賁研究において新たな成果を生み出すものである。

良賁は従来、翻經を主とした不空三蔵（以下不空と略す）門下の密教僧^{（３）}として、あるいは単に不空の協力僧と扱われてきた。そこで報告を兼ねて、『凡聖界地章』翻刻によって新たに判明した事柄を契機に、まずは良賁伝の再構築を試みる。ここで依用する僧伝史料は經論疏の序や『表制集』^{（４）}、『不空行状』、『続開元錄』、『貞

元録』を第一とし、時代が下る『宋高僧伝』等を二次的に用いる。ただし『表制集』収録の各不空伝や『不空行状』は不空教団側の史料であることに留意する。そして時系列で四項目を立ててまとめていく。なお唐代の「歳」の表記は全て「年」に、上都・中京・西京などの呼称も全て「長安」と統一した。

一、『仁王経』訳経以前と『凡聖界地章』について

『続開元録』の「至（開元）十二年三月十日。春秋六十一。僧夏二十九。微疾不興而卒於彼」より逆算すると、良賁は開元五年（七一一）生まれ、「陝府虞邑」（河南省陝県）出身で姓は郭、天宝八年（七四九）に二十三歳で出家したことになる。それ以後の事績を追うため、まず『凡聖界地章』の成立年代から検証したい。⁽⁵⁾
 『凡聖界地章』は中国側の関係史料には一切見られず、本朝の弘法大師の『御請来目錄』⁽⁶⁾と『十住心論』⁽⁷⁾によつて、初めてその実在と真撰が確かめられるといった現状である。その内容は、儒・道・仏の三教のうち、仏教の世界観、すなわち三界について、四門（欲界・色界・無色界・劫量）に分けて、基本的に唯識・俱舎の立場から説明したものである。それは序に「一往にして性相の意を明かすなり」⁽⁸⁾とあることから明らかにであるが、良賁は当時の華嚴教学隆盛の影響を受けた、単純な性相学とは言えない思想の持ち主でもあった。こと成立問題を考えるとき、重要な判断基準は以下の二点である。

①『凡聖界地章』における旧訳『仁王経』の引用。

②『凡聖界地章』序文並びに下巻末の「弁凡聖因果界地図記」に見られる編著の由来。

まず①だが、良賁も参加した永泰元年（七六五）四月上旬の『仁王経』訳経は重要な判断基準である。なぜならば『凡聖界地章』では上下巻合わせて『仁王経』が十五箇所⁽⁹⁾で引用されており、それらは全て伝羅什

良賁の生涯及び不空三蔵との関係について（山口）

訳『佛説仁王般若波羅蜜經』（以降「旧訳」と称す）を用いているからである（一見「新訳」と思われるものも一、二箇所あるが、これは第四項で詳述する）。「新訳」の訳経に関わった後ならば、単純に考えれば「新訳」を用いるはずであり、「新訳」翌年の成立である良賁疏がやはり「新訳」の疏であることを鑑みても、「旧訳」を用いる『凡聖界地章』は永泰元年四月以前の成立とするのが自然であろう。「新訳」の流布不足が原因で「旧訳」を用いたとする論も、『凡聖界地章』の事典的な性格から考えて首肯し難い。また第四項で述べる如く、「新訳」には良賁の教学も反映されているので、「新訳」成立後に意図的に「旧訳」を用いるとは考えにくい。よって①からは永泰元年（七六五）四月以前の成立と言い得る。

次に②によつてより詳細に検証する。良賁は『凡聖界地章』の序などにその由来を述べているので、やや長いがここに引用する（傍線・カッコ内補足は筆者）。

ああ、この図記はけだし観軍容使開府魚朝恩に因てこれを製するところなり。公の偉量深識にして聖を輔く。時を済う戎馬いまだ寝まず。兵を分陝に按ず。訓諫の暇ごとに殷に禪誦す。定をもつて闔閭（防御）を固め、慧をもつて権宜を乗る（適切に処置する）。志は繁禧を邀え、伏して宸極に薦む。良賁幸うに省観によりて、幕府に造ることを得。叨に清論に陪つて、議大千におよぶ。庸昧を揆らず（平凡な論義ではない）。しばしば（魚朝恩の）命を聞くことあり。ついに大いに衆典を免じて緝て手鏡となし、界劫を綜括す。刊削わずかに成る。まさにもつて微かに僧の末学を抒て長者の高問に対えんとす。日をもつて月に継ぎ製作の功無からんことを慙ず。これを未来に伝え、王臣の在ることあるを信ぜしめん。記両卷に分ち、彙めて四門を列す。一往にして性相の意を明かすなり。自下所引の経論、義理を指陳すること微かなり。広を求むるに暇なし。幸うに詳らかにせよ。

これにより代末期に権勢を振るった有名な宦官、魚朝恩（七二一―七七〇）の依頼によつて製作したことが

明らかである。この魚朝恩の役職名や行動から成立年代を考えるため、しばし歴史を概観すると、すなわちかの安祿山・史思明の乱（七五五～七六三）の渦中、史思明（～七六一）が洛陽を陥落せしめた（七六〇、閏四月）。この鎮圧に魚朝恩は觀軍容使として従軍していた。やがて宝應元年（七六二）十月、官軍は十月にウイグルの助力を得て洛陽を奪還したが、この時魚朝恩は長安から洛陽方面におよそ二百kmの要衝・陝州（現河南省陝県、「分陝」は陝州の東西両方を指す）を賊軍から奪還している。この功をもって開府儀同三司（文官従一品）を、またそれに先んじて七月に馮翔郡開国公を賜った。これが文中の「開府」「公」を指す。そして次第に権勢を強め、引き続き陝州に兵を駐屯させ、神策軍の指揮権を握った。つまり「聖」（原文では上一字開け）は上元二年（七六一）に即位した代宋である。やがて魚朝恩は広徳元年（七六三）十月におこった吐蕃の長安侵入に際して、長安から陝州に逃げ出してきた皇帝代宋を厚く保護し（「聖を輔く」、益々信頼を得た。吐蕃はすぐに撤退し同年十二月に代宋は長安に帰還したが、その際魚朝恩は自分の兵を陝州から長安に移し、以後禁軍（長安城北衛禁軍）の主力として自身の死まで宮廷で権勢を振るったのである。

このような流れを序文に当てはめていくと、序文はまず魚朝恩が代宋を陝州に厚遇し、長安奪回を期するころ（七六三、十月）から始まる。ここでは良賁が魚朝恩の活躍を実際見たように、あるいは「幕府に造ることを得」として長安に初めて入京した如く描写しているのが注目される。なぜならば良賁は前述のように出身地が「陝府虞邑」⁽¹²⁾（陝州）とあるからである。つまり出身に加えてそれらの描写から、このころ未だ長安に行かず郷里の寺で修行してこの出来事に遭遇した、という相関が垣間見えるのである。続いて序文の舞台は長安に変わる。すなわち同十二月、代宋は魚朝恩と共に長安に「繁禧」（馬の飾りが喜びの音をたてる。転じて凱旋）し、以後魚朝恩は栄達した（「宸極に薦む」）。これに同行したと思われる良賁は「省觀」⁽¹³⁾、すなわち宮城の南側の皇城（三省などの官庁街）⁽¹³⁾に紹介され、その後「幕府」（不詳。皇城内のいずれかの府か国子監

良賁の生涯及び不空三蔵との関係について（山口）

か」と称する論議の場に出席する機会を得た。おそらくそこには仏教のみならず儒・道教側の出席もあったことであろう。そして魚朝恩を交えた論議の中から、仏教の世界観たる三界を綴った『凡聖界地章』が製作されたと結ぶ。

ここからこの序は少なくとも広徳元年（七六三）十二月以降の製作となる。また観軍容使たる魚朝恩の目に留まるほどなので、良賁はこのころ陝州で既に名声のある学僧だったのであろう。

しかしこれだけではなぜ良賁が見込まれたのかがはつきりしない。そこでさらに『凡聖界地章』の文を引く。下巻末に「弁凡聖因果界地図記」という、独立した内題をもつ記述が三丁分ある。前述の序の「図記」という表記に対し「図の興り」と始まるので、正篇である『凡聖界地章』の由来を述べたものである。その内容は魚朝恩の疑問や意見を紹介して、編著の由来を回顧録風に述べたものと思える。ただ内容的に途中で切れているのだが、ともかくその冒頭にはこうある（カッコ内筆者補足）。

図の興りなり。皇唐の百四十有三歳（*上元元年・七六〇）、龍、重光に集まり、月、沾洗に建つをもつて思明（史思明）義に背き、功革つて洛（洛陽）未だ開けず。上（肅宗）は近臣（である）馮翔（侯力）観軍容使驃騎大將軍魚朝恩に委ねる。十方を訓師、（長安の）東方二陝を鎮ぜしむ。公、文をもつて経済し、武をもつて難を静む。運籌多暇（策をめぐらしその結果を待つ）、思いを高堂に禪めて、遂に良賁に命じて因て言うこと有つて曰く「儒は……（後略）¹⁴」

この文は、まず「皇唐の百四十有三歳」、つまり唐朝が武徳元年（六一八）に成立してから百四十三年目の上元元年（七六〇）閏四月に、史思明によつて洛陽が陥落されたことを記述している。序文もそうだが、この文は七六三・十月以後から見た数年前の出来事を綴っているため、役職名に注意しなくてはならない。つまり「上」とは正篇序において今上皇帝である代宋を「聖」とし、ここで先代皇帝の肅宗を「上」と表記し

たものである（原文では上一マス開く）。その肅宋が洛陽奪還の一環として「近臣馮翔隻（侯）觀軍容使驃騎大將軍魚朝恩」に「二陝」（陝州の東西両方を指す。序文中の「分陝」に同じ）の奪回を命じたことは史実と相違ない。「馮翔隻（侯）」は前述のとおり宝応元年（七六二）七月に賜った。なお魚朝恩は後年（七六五）に鄭国公・判国子監に就任しており、馮翔公と記述するのはそれ以前と言いうるので、序文の「公」も馮翔郡公と解釈したのである。ただ武官の従一品である「驃騎大將軍」に何時就任したかについては、関係史料（新旧『唐書』『全唐文』『唐会要』『冊府元龜』等）から記述を見出し得なかったので不詳である。

これらの記述から、この文は魚朝恩が陝州に兵を駐屯して、長安に駐屯する以前のころ（即ち七六二、十月・七六三、十二月）、思うところあって良賁に儒・道・仏の違いを直接問う機会があったことを示している。引用の（後略）以降は『凡聖界地章』の草稿ともいふべき内容である。つまり『凡聖界地章』の製作そのものは前述の如く広徳元年（七六三）十二月以後長安においてなのだが、『凡聖界地章』製作に繋がるのは陝州におけるこの期間であったのである。魚朝恩がその駐屯地において良賁に様々な質問をし、その実力を認めたからこそ、前述の如く長安入京時に随伴させたのであろう。またここで注目すべきは魚朝恩個人への賛美が強い点であろう。確かに軍功はあったが、客観的には必ずしも魚朝恩だけが群を抜いた活躍ではなかった。しかし良賁は己を長安の中央仏教界に紹介してくれたことに対する強い恩から、そのように記したと思われる。また後に「外は經史儒墨の九流に博し、内は仏經五乗を習う」と評された良賁だからこそ、魚朝恩も『凡聖界地章』編著を依頼したのであろう。つまりここから良賁と魚朝恩の、『仁王經』訳経以前における個人的な強い繋がりが見てとれるのである。

以上①②をまとめると、洛陽回復（七六二、十月）以降、魚朝恩が駐屯地である陝州において在郷僧良賁に仏教の質問を度々した。その関係は吐蕃の長安侵入（七六三、十月）まで約一年ほど続き、魚朝恩と共に

長安に入ってから（七六三、十二月）、それまでの草稿を元に『凡聖界地章』を編著したのである。そしてそれは①や「馮翔公」という表記から、不空の『仁王經』訳経（七六五、四月）以前に完成していたのである。長安に入った良賁は、『凡聖界地章』上巻冒頭に「京青龍寺沙門良賁集」とあることから、青龍寺に入寺して『凡聖界地章』を著したと一応考えられる。⁽¹⁸⁾ただいつ青龍寺の「寺主」⁽¹⁹⁾になったかは不明である。ともかく良賁は以後、「議大千におよぶ」ような論場での活躍や『凡聖界地章』の編著によって、不空の『仁王經』訳経までにはそれなりの名声を得ていたはずである。

二、『仁王經』訳経とその後について

永泰元年（七六五）四月二、四日にかけて、不空は『仁王經』新訳を請い勅許された。⁽²⁰⁾弟子以外にも多くの僧が招集され、その際良賁の序列は僧の中で十四人中八番目であった。そして大明宮南桃園（長安城北東部の宮）において不空が訳主となって『仁王經』と『密嚴經』を新訳したのである。早くも四月十五日に完成したので進上し、宮中承明殿灌頂道場にて代宋が序を冠した。その「新訳」の御製序にはこうある（傍線筆者）。

遺詔。不敢怠遑。延振錫之群英。終為山之九仞。開府朝恩許国以身帰仏以命。彌我真教申夫妙門。爰令集京城義学大徳良賁等。翰林学士常袞等。於大明宮南桃園。詳訳護国般若畢。并更写定密嚴等經。⁽²¹⁾

ここでは代宋の信頼厚い魚朝恩が仏教を信奉しており、その直後に『表制集』の順番では中堅であった良賁が、初めて「京城義学大徳」の筆頭としてあるのがポイントである。この変化は如何なる理由によるものであろうか。そこで訳経の人事を、最も詳しく「翻訳十七人」として挙げる『貞元録』⁽²⁴⁾によって整理すると、

①不空、訳梵本。②法崇、證梵本義。③良賁、筆受兼潤文。④子鄰、潤文。⑤懷感、證義。⑥建宗、同。⑦飛錫、同。⑧義嵩、同。⑨潛眞、同。⑩道液、同。⑪趙悟、同。⑫應眞、同。⑬歸性、同。⑭慧靈、同。⑮慧靜、同。⑯圓寂、梵音。⑰道林、讚唄。⑱義秀、校勘。⑲弘照、校。このうち『表制集』には⑫⑬⑭⑮⑯が欠けている。良賁の「筆受兼潤文」の序列について編者円照が三番目にしているが、これは役職の序列に従ったものと思われる。また訳経は国家事業であるので役人も参加し、同じく『貞元録』に以下の六名を挙げた（官名略）。①典、馬奉獻。②判官、楊利全。③副使、駱奉仙。④駕使兼統其事、魚朝恩。⑤翻訳、常袞。⑥同、柳枕。つまり「翻訳十七人」とは僧の①⑮と役人の⑤⑥である。またこのように役人側では「駕使兼統其事」⁽²⁶⁾として魚朝恩が取り仕切っていたことが明白である。筆者はここに、先述の「新訳」御製序における良賁の筆頭扱いの原因を見る。つまり不空にとって良賁は四月二日の申請時に協力者の一人として募ったのに過ぎなかったのが、申請後権勢をもって仕切り役になった魚朝恩が、陝州以来密接な関係にあった良賁を筆頭に据えたのである。無論その能力が必要な役であるが、既に『凡聖界地章』において実証済みであった。なおこの両経は良賁が『仁王経』、飛錫が『密厳経』⁽²⁷⁾の担当であったが、『表制集』の順番で二番目の飛錫が担当した『密厳経』⁽²⁸⁾の代宋序には対照的に魚朝恩の名が出てこない。これも魚朝恩と良賁の関係を暗示するものであろう。

同じく永泰元年（七六五）四月下旬、不空は詔にて『大聖文殊師利菩薩讚仏法身礼』を内道場で訳した⁽²⁹⁾。その不空撰と思われる序で、先日『仁王経』訳経に触れて「上都義学沙門良賁等一十六人」⁽³⁰⁾とある。これは不空の中でも、良賁の立場が上がったことを示していると言えよう。『表制集』で八番目だったからこそ、この推移の意義が問われるのである。

ここで何故魚朝恩が訳経の仕切り役に就き、良賁を筆頭に据えたのかを検討したい。当時魚朝恩にとって

良賁の生涯及び不空三蔵との関係について（山口）

も安史の乱の余波として外に吐蕃・僕固懷恩⁽³¹⁾が、内には政敵がいた。よって護国のためのこの訳経が自分の推薦した僧によって主導され、なおかつその験が見られれば、魚朝恩にとって大変名譽、かつ政敵にとっては芳しくない出来事であったと思われる。元来不空の後援者としては、哥舒翰、李元琮⁽³²⁾、李憲誠、元載、杜鴻漸、王縉、裴冕などが著名だが、魚朝恩もその一員と扱われてきた⁽³³⁾。たしかに良賁が不空門下であるという前提では、魚朝恩も不空の後援者の一人と定義するのが矛盾無く、長い間この構図が一般的であった。しかし魚朝恩の名前は『表制集』や不空伝に不自然なほど全く出てこない。魚朝恩が僧伝や經典の序にその名を表すのは全て良賁が関係する場合である。しかも魚朝恩は後年、元載の計略によって失脚し、前述の不空の後援者達とも政治的に対立していた⁽³⁴⁾。このように魚朝恩の政敵は不空の後援者とはほぼ重なることから、良賁の後援者としての魚朝恩、と見たほうが様々な点で矛盾が無い。つまり不空が護国のために提案した『仁王経』訳経は、否応無く宮廷の政争に巻き込まれていったのである。以後それに留意しながら論を続けた⁽³⁵⁾。

同年八月八日、「大安国寺上座臨壇大德沙門乗如等」が新訳両経による百法師・百座嚴修を願い出た⁽³⁵⁾。乗如は広徳二年（七六四）の「大興善寺に大德四十九員を置くを請う勅一首」で「東都（洛陽）、敬愛寺、僧、乗如⁽³⁶⁾とあるのが見え、このころまでに長安に来て大安国寺に籍を置いていたことになる。ともかく『続開元録』⁽³⁷⁾等によると、その法要は新訳の『仁王経』『密嚴経』を各々百座講演するもので、雨天のため若干順延したものの、長安の資聖寺、西明寺で九月一日から盛大に始まった。途中僕固懷恩の軍が長安に迫り中断したが、閏十月二十二（二十三）日に結願し、反乱軍の退却も法要の験として歎喜された。魚朝恩の狙い通りになったわけである。この法要で良賁は「資聖寺百座法師良賁等」として「仁王般若護国密嚴等経等」を講説し、講師の中心人物であった。なお「西明寺百座法師」は懷感であり、懷感⁽³⁸⁾は西明寺の結願（九月十六日）を迎えて感謝の意を代宋に上表している。一方魚朝恩も新訳の『仁王経』『密嚴経』を内道場から会場に移送

する役目を負っており、その際に靈験があったと伝えている。魚朝恩の取り仕切りは訳経のみならず、法要にも及んでいたと言えよう。またこの表記から、百座法要までは良賁の所属寺院が資聖寺であった可能性も捨てきれない。⁽³⁹⁾

一方の不空は、この約五十日（一日二座）にわたった華々しい頒行法要の記録に殆ど見えていない。⁽⁴⁰⁾ 不空は九月二日、即ち開白の翌日付けで「御製仁王經序を謝す表一首」⁽⁴¹⁾を上表して慶事を賀しているが、その日付から当事者として参加していない故の上表と見ていい。法要に参加しなかったのは、伝統的な百座講読よりも陀羅尼念誦・密教修法を重視したからとも考えられるが、そのような修法に関する記述は無い。唯一結願後の資聖寺新講堂落慶法要の褒賞の場で不空の名が見られるのみである。すなわち『統開元録』に、

取閏十月二十二日。設無遮齋以成慶散是日也。……飯僧既畢。六樂爭陳。百戲充盈。歌吹尽日。京城大德各三十。不空三藏賜九百匹絹帛錦綵。以充數焉。侍者小僧各五十匹。又特降恩旨。賜資聖講堂。名為永泰善法之堂。此即萬古千秋法門故事也。自蕃戎入境。夜集僧徒。共念摩訶般若波羅蜜多於此堂內。未盈累月果得清平。此乃聖力經威感斯福庇。翻經百座賜寶珍財。……至十一月一日。恩旨荐臻。不空三藏和上。故金剛三藏。……可贈開府儀同三司。仍賜号大弘教三藏。⁽⁴²⁾

とあって、落慶の日に盛大な齋が行われ、京城大德三十人の中でも不空が「九百匹絹帛錦綵」を賜ったとある。ただこれは百座法要への参加ではなく訳経への褒賞として見るべきであろう。またその夜に賊軍が国境を侵したという知らせがあり、資聖寺の新講堂（永泰善法之堂）にて僧らが摩訶般若波羅蜜多を「念」じ、その甲斐あって平穩を得たとしている。文面からはその「念」がどのような修法・法要を指すのか、不空が参加したのかも不明だが、その後に「翻經（に参加した僧と）百座（に参加した僧）」に褒賞があったとするので、この臨時法要に限っては参加した可能性もあろう。そして十一月一日に矢継ぎ早に故金剛智に開府及

良賁の生涯及び不空三蔵との関係について（山口）

び号、不空本人に特進試鴻臚卿及び号を下賜している。⁽⁴³⁾ここから賜号は訳経のみならずこの臨時法要に對しての褒賞とも考えられる。ともかく百座法要には出仕しなかったと考えられるが、それは不空の俗弟子、逍遷『不空三蔵行狀』の以下の記述からも窺える。

仁王密嚴二經は皇帝が特に經序を製す。勅命ありて頒行の日、慶雲大いに現れ、朝を挙げて賀を表す。これを国史に編めば永泰元年十一月一日なり。大師に特進試鴻臚卿を制授し、大広智三蔵と号す。⁽⁴⁴⁾

このように法要には直接触れず、不空の授号をもつて二經の訳経の褒賞と総括している。不空教団側の史料というべきこの記述と、『続開元錄』等各歴史書の法要の華々しい記述には、このような温度差がある。この逍遷の記述態度こそ、不空が法要に不参加だったことの証左と言えよう。

翌大曆元年（七六六）二月十一日、「青龍寺翻經講論沙門良賁」は『仁王經疏』制作の詔を受け、大明宮南桃園にて「賛演」して製し、同年十一月八日に『疏』三卷（いわゆる青龍疏・良賁疏）として完成させ、同日、『陀羅尼念誦儀軌』一卷（不空奉詔訳『仁王護国般若波羅蜜多經陀羅尼念誦儀軌』一卷を指すと思われる）と『承明殿講密嚴經對御記』一卷と合わせて進上した。⁽⁴⁵⁾良賁が疏を詔によって撰した背景には、当然魚朝恩の働きかけがあったと思われる。また同時進上の『仁王陀羅尼念誦儀軌』には、不空門下と思われる「大興善寺翻經沙門慧靈」の序が付されている。それによるとまず、

迺辟興善寺大廣智三蔵不空。与義学沙門良賁等一十四人。開府魚朝恩翰林學士常袞等。去歲夏四月。於南桃園再訳斯經。⁽⁴⁶⁾

とあり、昨年の『仁王經』新訳に触れている。ここから『仁王陀羅尼念誦儀軌』の序が翌大曆元年に著されたことがわかり、その年次から件の『陀羅尼念誦儀軌』一卷が『仁王陀羅尼念誦儀軌』に他ならないと判断できる。しかし問題は何故この良賁疏以外の二部も良賁が進上しているのかである。特に『仁王陀羅尼念

誦儀軌』については、これに関係してかの大村西崖氏が不空撰ではなく良賁の撰だからとしている。⁽⁴⁷⁾それは同序に「三蔵是以訳貝多之文。良賁法師乃受從簡素。始夫処所方便終其親行儀則修為五門第以位次」⁽⁴⁸⁾とあり、実際に儀軌の構成がそうなっていることを根拠とする。さらに本文冒頭に「依三蔵所持梵本金剛頂瑜伽經云……」とある上、良賁疏と同一部分が認められ、なおかつ良賁疏に「別の儀軌の如し」などともある。⁽⁴⁹⁾これらから『仁王陀羅尼念誦儀軌』は、良賁疏に先行もしくは同時進行で製作され、良賁がその製作に深く関わったことが確実である。では全てを良賁一人で撰述したかという点、慧靈の序の存在や「三蔵所持梵本」の多用などから、不空教団が関わったこともまた確実である。どちらにせよ良賁は訳経を通じて、この頃までに儀軌の編纂をしうる程度の密教理解を得ていたことになる。

また『承明殿講密嚴經対御記』一卷は現存せず、⁽⁵⁰⁾撰述者は不明であるが、恐らくは良賁と無関係ではないと思われる。題から察するに、その内容は代宋への『密嚴經』講説であろう。つまりこれらは不空教団の参与があつたとはいえ、良賁が中心になって製作をすすめたからこそ、自身で進上したのである。

『仁王經』訳経、そして特に頒行たる百座法要から疏・儀軌の進上にかけて、対外的に前面にあつたのは見てきたとおり「駕使兼統其事」魚朝恩と良賁である。ここからこの両経関連については、為政者側では魚朝恩が、僧側では魚朝恩と懇意である良賁が取り仕切つたという構図が浮き彫りになる。しかもそれは除々に進行し、疏の提出時には完全に良賁が主導権を握るに至つたと言える。なおこの両経をめぐる一年半以上の出来事の後、良賁が不空の訳経に参加した記録は無い。『表制集』によればそのころより不空は五台山金閣寺に傾注してゆき、そこでも『仁王經』『密嚴經』の位置付けは重要であつたが、これに良賁と魚朝恩が関わつた記録も無い。

三、大暦二年以後について

大暦二年（七六七）、魚朝恩は長安城東北、通化門のすぐ城外に章敬皇后の追善のためと称して章敬寺という巨大伽藍を建立した。⁽⁵¹⁾ その落慶に良賁が駆けつけ、「疏をもって報じ伏膺」したとある。⁽⁵²⁾ またこの後、年次は不詳だが良賁は長安大安国寺において長期間の講筵を行い、大変な盛況であったと伝える。⁽⁵³⁾ 不空の弟子らが長安で開講するときは、その申請上表文が『表制集』に残っている場合があるが、⁽⁵⁴⁾ 良賁の名はそこには無い。つまり不空を通さずに開講したのであり、このことから不空の弟子といった構図が否定されると思う。

大暦五年（七七〇）、三月（寒食の日）、長らく権勢を振るった魚朝恩であったが、代宋の内諾を得た元載らの計略により誅殺された。⁽⁵⁵⁾ 三月十日には觀軍容使を罷免され、禁軍の混乱を避けてか、しばらくその死は隠されたと伝える。翌六年、良賁は突然集州（四川省南江県）に「徙居」（左遷）させられ、以降かの地で精力的に講筵したと伝える。これは魚朝恩と最も関係が深かった僧として、それに連座するような形式での左遷であったことは論を待たないであろう。また従来全く注目されなかったが、伝不空訳『毘沙門儀軌』では、不空の法力と毘沙門天の威力を喧伝した後、それを実践している僧として良賁が次のように紹介される。

至大暦五年。於集洲見内供養僧良賁法師。移住集洲開元寺。勘経像与大悲本同。昔防援国界。奉仏教敕。令第三子那捧塔随天王。⁽⁵⁷⁾

『続開元録』より年次が一年早い、「内供養僧」良賁が国境警備のため集州の開元寺に移住し、毘沙門天第三王子法を修法したという内容である。歴史的事実ではないだろうが、ここで注目すべきは集州の「開元寺」（唐の国分寺）という具体的な場所を示すことと、左遷ではなく「移住」とし、護国の法を修す密教僧として

表記してあることである。頼富本宏博士⁽⁵⁸⁾によると、この儀軌の成立下限は宗叡の帰朝時（八六五）に設定されるという。良賁の死後百年たたないうちの良賁観が、不空の弟子的な扱いで、その護国の志を前線で引き継ぐ密教僧というものになっていたということは注目に値しよう。ただこの儀軌の製作者が何を参照してこの逸話を創作したかという点、新訳『仁王経』で説く「大黒天」⁽⁵⁹⁾を、良賁疏が不空所持の「別梵夾」を参照して「闘戦神」として詳しく説明する箇所⁽⁶⁰⁾に、恐らくは触発されたのであろう。ともかくこの良賁観は貴重である。

翌大暦六年（七七二）十月十二日、不空は「三朝にて翻するところの経が目錄に入りて流行を請う表」に新訳『仁王経』『密厳経』と『仁王陀羅尼念誦儀軌』、良賁『仁王経疏』を最末尾⁽⁶¹⁾に記し、上表した。これはおそらく良賁の集州左遷後の出来事と思われるが、このことは不空と良賁の関係を考える上で大変重要なことである。見てきたように良賁は不空の弟子とは言い難い。前二経は不空教団が大いに関わっているので問題なく、『仁王陀羅尼念誦儀軌』もやはり全てが良賁撰述ではなく、不空教団の参与があったから入蔵したのであろう。しかし良賁疏がここに入るのは如何なる理由によるものだろうか。思うに『仁王陀羅尼念誦儀軌』に並行して製作された良賁疏にも、同じように不空教団の参与があったからではないだろうか。これについては次項で確認するが、ここで魚朝恩亡き後は元載が権勢を振るったから、これに乗じて不空が横車を押し、落ち目の良賁に意趣を返したなどと邪推するのはもつてのほかである。

『続開元録』の良賁伝はこのことについて「至大暦七祀正月十六日。不空三藏奏請入目。旨依奏。仍宣付中外。並編入一刀経目錄」⁽⁶²⁾としかなく要領を得ない。ただ編者円照は、良賁伝の中にこの文を挿入したことや、『続開元録』の不空目錄から意図的に良賁疏を外していること⁽⁶⁴⁾から鑑みて、これに異議があった人物なのであろう。

良賁の生涯及び不空三蔵との関係について（山口）

大暦九年（七七四）六月十五日、不空は入滅した。一方良賁の卒伝は『統開元録』にこうある。

至十二年三月十日。春秋六十一。僧夏二十九。微疾不興而卒於彼。遺身還京上都城東置墳塔矣。即十三年也。其表中云。陀羅尼念誦儀軌一卷。承明殿講密嚴經対御記一卷。昔修撰訖隨表上。留在紫宸未宣中外訪本不獲。故欠列名。⁽⁶⁵⁾

これによると、大暦十二年（七七七）三月十日に、病のため符陽（四川省南江県）にて六十一歳で入滅したとある。また『仁王陀羅尼念誦儀軌』と『承明殿講密嚴經対御記』を進上したというが、⁽⁶⁶⁾ともかく円照当時において既に散逸して見当たらないとしている（これは『対御記』のみを指すか）。卒伝にこの二書が出てくること一つをとっても、これらに良賁が深く関係したことを暗示しているといえよう。そして翌年長安城の東に「墳塔」を建てたというが、それは長安において良賁を慕う集団が健在であったことを示す。また想像だが、その塔はかつての住寺青龍寺（新昌坊。このころ既に恵果が賜った東塔院があった）が見える位置にあったのかもしれない。ともかく良賁の生涯を一言でいえば、魚朝恩と浮沈を共にしたと表現できよう。

以上のように良賁の生涯を不空、魚朝恩との関係を軸に検証した。以下整理すると、不空と良賁の関係を考える上で、二つの焦点となる出来事がある。まず一つめは永泰元年（七六五）前後に、『凡聖界地章』をきっかけに良賁と懇意になった魚朝恩が、一連の『仁王経』『密嚴経』をめぐる訳経↓百座法要↓疏等提出を取り仕切り、その権勢で良賁を前面に立てたことである。この期間、良賁が不空の弟子でないことは確かであり、『仁王経』訳経以降は単純な協力者ではなく、宮廷の政争を反映した関係にあったと言える。良賁を「請再訳仁王経制書一首」で八番目に列した時点では、その順番から察して不空自身そうなるとは思っていないかっただであらう。

二つめの焦点は、大暦六年（七七二）の魚朝恩失脚後に良賁が左遷され、その後不空が良賁関連の経疏を

も自身の目録に入れて入蔵したことである。不空のこの行動は魚朝恩存命中には難しかっただろうが、それ以前から不空教団の所産という自負を持ち、良賁疏を含めた経・儀軌・疏のセットでの普及を望んでいたためそのようにしたのである。これについては教学的な観点も必要なので、次項でさらに検証する。

四、不空と良賁の関係について

前三項で良賁の生涯を俯瞰したが、不空と良賁の関係は実際如何なるものだったのであるか。お互いの関係は「自分の後援者の政敵が後援している僧」である。しかしただで両者も不仲であったとするのは短絡的であろう。事実良賁が不空の協力者（『宋高僧伝』）として、あるいは弟子の密教僧（『毘沙門儀軌』）としてのイメージが後世にまで残るのには何らかの理由があったはずである。それを検証するため、ここでは僧伝ではなく、政治的な要素が希薄な両者の著述に焦点をあてて考えていく。

『凡聖界地章』、新訳『仁王経』、良賁『仁王経疏』には、良賁の教学の連続性が見られる。また逆に良賁『仁王経疏』においては不空の影響も見られる。よってこれらから二人の関係を検証したい。それらはそれぞれの『仁王経』の扱いを検証することによって確かめられ、枚挙にいとまが無いが、ここでは三例ほどを挙げる。

まず『凡聖界地章』に「仁王経云。南閻浮提十六中国五百小国十千」⁽⁶⁷⁾とある。これは「旧訳」の「其南閻浮提有十六大国。五百中国十千小国」⁽⁶⁸⁾の引用である。しかし「新訳」の当該箇所は「此瞻部洲十六大国。五百中国十小国」⁽⁶⁹⁾と若干の変化が見られる。これについて良賁疏では⁽⁷⁰⁾

経。此瞻部洲十六大国五百中国十小国。解曰。此瞻部洲者從樹立号。洲形大小身量寿量作業趣果如常

良賁の生涯及び不空三蔵との関係について（山口）

分別。十六大国者至下当列。問旧経但言十千小国。此言十万何乃甚歟。答旧経多以教所及処而憑論也。云何知然。如金光明第六護国品云……。梵本不同各如文矣。從此第二有難受持。

とある。つまり「新訳」で「十千」を「十万」に変えた理由を、良賁疏で『金光明経』や「梵本」を引いて説明しているのである。「梵本」とは不空が訳経の時によく用いたとされる「貝多之文」⁽⁷¹⁾と思われ、良賁が不空の教学を尊重していた好例である。また良賁疏撰述時にそれを参照できるということは、この疏が不空教団の参与によって成立していることを物語っている。

次は逆に良賁の教学が「新訳」に影響を及ぼしている箇所を示す。「旧訳」で「七宝金光四天下 伏忍聖胎三十人 十信十止十堅心」⁽⁷²⁾とする箇所が、『凡聖界地章』では「七宝金光四天下……准経、十善鉄輪十住銅輪十行銀輪十迴向金輪」⁽⁷³⁾となっている。これが「新訳」においても「七宝金輪四天下 伏忍聖胎三十人 十住十行十迴向」⁽⁷⁴⁾と踏襲され、さらに良賁疏では「七宝金輪四天下。解曰。十住菩薩作銅輪王。十行銀輪。十迴向位作金輪王」⁽⁷⁵⁾として「光」が「輪」になるなど「新訳」を受けている。一見「十住十行十迴向」の記述から、『凡聖界地章』で「新訳」を引用しているようだが、『凡聖界地章』では上巻三十二丁あたりから『華嚴経』によって十善・十住・十行・十迴向の説明を延々と続けている。要するに「旧訳」の「十信十止十堅心」を、『華嚴経』によって会通して『凡聖界地章』の上のような記述としたと見るべきで、それが不空訳の際に反映されたと思われる。

また『凡聖界地章』では上巻四十五丁あたりから下巻二十九丁まで、菩薩の十地について『仁王経』を用い、『瑜伽論』『華嚴経』で会通して説明する。この方法は「新訳」に大きな影響⁽⁷⁷⁾があるが、紙幅の都合で初地のみ示す。まず「旧訳」に「若菩薩住百仏國中。作閻浮四天王。修百法門。二諦平等心化一切衆生」⁽⁷⁸⁾とあるが、『凡聖界地章』ではこれを初地と扱い、「歡喜地者、仁王経云、若菩薩住百仏國中、作閻浮提四天王、

修百法門、二諦徘徊心化一切衆生⁽⁷⁹⁾」としている。この傍線部の変化はやや後に「明初地菩薩輪王夫聖位金輪王者仁王華嚴並云作閻浮提王瑜伽論云作轉輪王居瞻部洲王四天下⁽⁸⁰⁾」とあることから、『華嚴經』や『瑜伽論』によって換句していることがわかる。「歡喜地」も『華嚴經』から命名している⁽⁸¹⁾。これが新訳にも踏襲され、『若菩薩摩訶薩住百佛刹。作瞻部洲轉輪聖王。修百法明門。以檀波羅蜜多住平等心。化四天下一切衆生⁽⁸²⁾』となっている。この「新訳」における換句は、『凡聖界地章』における『瑜伽論』採用を踏襲していることが瞭然である。

このようにお互いの教学が反映しており、ここから二人の教学上の協力関係が窺えるのである。先行研究によれば、良賁疏は円測や道氤の著作に影響を受けていることが確認されている。また見てきたとおり華嚴教学の影響も無視できない。のみならず良賁疏では、不空所持の「別梵夾」をもつて解釈することが多い⁽⁸⁴⁾。これは顕教經典の翻訳に不慣れな不空と、密教については恐らく詳しくなかった良賁が、お互いの足りない部分を補った結果とも言える。またこのことから逆説的に、不空の訳場における「筆受兼潤文」良賁の発言力を窺い知れよう。また不空が目録に良賁疏を入れた理由とは、このように良賁疏も『仁王陀羅尼念誦儀軌』も、不空教団あつての所産だったからである。それらを経・儀軌・疏のセットで流布⁽⁸⁵⁾（中外に施行）させるためであつて、左遷後の良賁が入蔵するすべを持たなかったという現実的な理由もあるだろう。

以上良賁の教学については深く考察しえなかったが、若干の例から二人の教学的な関係は良好であつたことが確認できたと思う。そして後世、このような関係から政治的な難しさが薄れて、良賁が不空の協力者であつたという印象のみが強くなり、『宋高僧伝』の「永泰中に不空盛んに伝訳を行うも、実にその人に難しむ⁽⁸⁶⁾。賁、その翻度に預かる」という表現につながつたのである。さらに「別梵夾」を駆使して疏や儀軌を編纂するという密教的な一面が、前述の『毘沙門儀軌』のような表現につながつたのであろう。円照が『続開元録』

良賁の生涯及び不空三蔵との関係について（山口）

で良賁伝に「不空三蔵奏請入目」と挿入したのも、協力僧としての良賁像に一役買ったのかもしれない。ともかくこれら諸伝が伝える単純な「協力者」像が、現代に至るまで残ったのである。

結

以上四項にわたって、良賁伝を再構築し不空との関係を再確認した。以下簡潔にまとめる。良賁は陝州において魚朝恩に見出されて長安の中央仏教界に進出し、まず『凡聖界地章』を編著した。そして不空の『仁王経』新訳に参加し、百座法要講師をつとめ、『仁王経疏』を撰述した。その際良賁と不空はお互いの後援者が政敵同士であり、魚朝恩の絶頂期であったことから、良賁が前面に立つ機会が続いた。またこの時期の『仁王経疏』『仁王陀羅尼念誦儀軌』は、お互いの協力の賜物でもあった。以後両者は疎遠になるが、これは魚朝恩が代宋の目に直接触れない五台山に関わることに興味が無かったためと思われる。魚朝恩の死後良賁は左遷されるが、その後不空は自身の目録に良賁関連の著作も入蔵した。これは第四項で確認した通り、不空と良賁が教学的には良好な関係にあり、なおかつそれらが不空教団参与の賜物だったからで、決して不空が横車を押したわけではない。

良賁は不空の何かと言え、潜真のよう⁽⁸⁶⁾に不空に伝授されたわけではなく、ましてや弟子というわけでもない。しかも魚朝恩とのコンビで一時は不空教団の活動を遮るようなことすらあった。しかし教学的な協力関係は否定し難いのも事実である。故に政治的には難しい立場にあったが、基本的には訳経の協力者として扱うのが妥当で、逆に良賁から見た不空も同様であろう。むしろ魚朝恩こそが不空教団の活動にとって障害だったと言える。結果的に訳経の協力者として『宋高僧伝』と同じ論調になったが、魚朝恩との関連を軸に

再構築しえたと思う。

《良賁略年表》

唐曆	西曆	年齢	事項
開元五	七一七	一	「陝府虞邑」(河南省陝県)に生まれる。姓は郭。
天宝八	七四九	三三	得度受戒。地元陝州の寺と思われる。
宝応元	七六二	四六	十月、魚朝恩陝州に駐屯。交流始まる。
広徳元	七六三	四七	十月、魚朝恩が代宋を陝州に迎える。十二月、長安移住し青龍寺入寺か。以後『仁王経』訳経参加以前に『凡聖界地章』二巻を編著。
永泰元	七六五	四九	四月、大明宮にて不空の『仁王経』二巻の訳経に「筆受兼潤文」で参加。十五日完成。承明殿にて代宋の序付く。九月、十月、百座法要で「資聖寺百座法師」を務める。不空不参加。
大暦元	七六六	五〇	二月十一日、『仁王経疏』撰述の詔受ける。以降大明宮にて「賛演」して製作す。十一月十八日、『仁王経疏』を『仁王陀羅尼念誦儀軌』・『承明殿講密厳経対御記』と合わせて進上。これ以前に『仁王陀羅尼念誦儀軌』を「簡素・五門」化する。
大暦二	七六七	五一	魚朝恩の章敬寺落慶に講師として参加。
この頃			長安大安国寺にて長期の講筵。
大暦五	七七〇	五四	三月、魚朝恩亡。『毘沙門儀軌』によるとこの年集州(四川省南江県)に左遷される。
大暦六	七七一	五五	十月十二日、不空、自身の目録に良賁関連も入れる。この年集州に左遷される。
大暦八	七七三	五七	六月十五日、不空入滅。

良賁の生涯及び不空三蔵との関係について（山口）

大暦十二	七七七	六一	三月十日、病のため符陽（四川省南江県）にて入滅。 「遺身」を長安に還し、城東に「墳塔」を建立す。
大暦十三	七七八		

註

- (1) 『続開元録』の良賁伝に「若性若相教義周円」とある（正蔵五五、七五八b）。各著作内容もそれを裏付ける。
- (2) 凡聖界地章翻刻研究会「『凡聖界地章』翻刻研究（上）」（『大正大学総合佛教研究所年報』二六掲載予定）。下巻も同年報に掲載予定。以降本稿においては大正大学所蔵版本の丁数を用いるが、それは『年報』の底本でもあるので相違無い。
- (3) 今井淨圓氏の以下の論文など。「不空門下の研究」（『龍谷大学大学院紀要』六）、「不空門下の密教僧良賁について」（『龍谷大学仏教学研究年報』二）、「不空門下の念誦僧と翻訳僧について」（渡邊隆生教授還暦記念『佛教思想文化史論叢』）。
- (4) 中村裕一「『代宋朝贈司空大弁正広智三蔵和上表制集』解説」（久曾神昇編『不空三蔵表制集他二種』）の指摘によると、現行本は六巻だが『続開元録』に「贈司空大弁正広智不空三蔵碑表集七巻」（正蔵五五、七六五a）とある。中村氏はこれを「両者は近似する異本か別巻一巻が脱落した同一書」とする。一方向井隆健氏は現行の『表制集』が十一首足りないとして、『続開元録』中に『表制集』未収録部分があつたことを示唆する（『不空三蔵伝記資料一考察』『大正大学大学院論集』二二）。両論合わせると興味深い。
- (5) 正蔵五五、七五八c。『宋高僧伝』は貴族出身とする上、出身地を「河中虞郷」（山西省河東道虞郷県）とするが典拠不明（正蔵五〇、七三五a）。本稿では史料の信頼性から『続開元録』を優先する。以後同じ。
- (6) 弘全一、九二。「辯凡聖因果界地章二卷良賁法師撰」とある。現行本は外題・内題共に『凡聖界地章』である。この変化は、恐らくは元々『辯凡聖因果界地章』だった外題が何らかの事情で略されて「凡聖界地章」となり、

下巻末の「辨凡聖因果界地圖記」の内題のみが乱脱しにくい箇所にあるため原型をとどめたのではと思う。

- (7) 『十住心論』第一住心から第六住心にわたり無記銘で長文を引用する(弘全一、一四三―三三八)。引用箇所については註2の翻刻の他、それに先行する勝又俊教博士編『弘法大師著作全集』一、小野塚幾澄博士『空海教学における背景思想の研究』(資料篇)が詳しい。特に小野塚博士著作では詳細な比較がしており、大いに参考した。また無記引用の理由については加藤純章博士『十住心論』第四住心の問題点(『豊山学報』三三)に興味深い指摘がある。

(8) 上巻一丁左

- (9) 『凡聖界地章』の内容に触れた唯一の先行論文である平井宥慶「唐代中期の『仁王経』講説」(『豊山教学大会紀要』四)には、『凡聖界地章』の引用仏典一覧表が付されている。それによると『仁王経』引用は一八箇所だが、これは經典名のみで実際には引用していない仏典も数えているためである。他の仏典の引用数も注意が必要だが、この点に留意すれば極めて有益な成果といえる。

(10) 上巻一丁右―左

- (11) 『旧唐書』一八四、『新唐書』二〇七、各魚朝恩伝。瀘洲瀘川(四川省瀘県)生まれ、代宋の代では李輔国・程元振に続いて権勢を振るった宦官であった。正史は官僚主導のため、宦官に辛辣な記述が多く、魚朝恩はその典型の一人である。

- (12) 正蔵五五、七五八c。陝州が「陝府」に昇格したことは『旧唐書』に「陝州大都督府隋河南郡之陝県。義寧元年(六一七)。置弘農郡。領陝・嶠・桃林・長水四県。二年。省嶠県。武徳元年(六一八)。改為陝州総管府。管陝・鼎・熊・函・穀五州。仍割長水屬虢州。其年復立嶠県。二年。復割嶠県屬函州。三年。又置・南韓州・嵩州。並屬陝府」(卷三八 志第一八 陝州大都督府)とある。「虞邑」は不詳。

- (13) 除松撰・愛宕元訳注『唐兩京城坊攷―長安と洛陽』(東洋文庫五七七) 参照。

良賁の生涯及び不空三蔵との関係について（山口）

- (14) 下巻別一丁右
- (15) 『旧唐書』一八四、『新唐書』二〇七、各魚朝恩伝。ただし『旧唐書』は翌年八月とする。
- (16) 『続開元録』（正蔵五五、七五八b）。『宋高僧伝』には「外通墳典内善經論」とある（正蔵五〇、七三五a）。
- (17) 広徳元年（七六三）六月に魚朝恩は長安に「入朝」している（『旧唐書』卷一一、代宋）。このときの長安滞在日数は不詳（最長一〇月まで）だが、ここからその期間に、魚朝恩が既に入京していた良賁と長安で会っていたという推測も成り立つ。しかし上述の『凡聖界地章』の記述から、本稿では陝州邂逅説をとる。
- (18) 現行『凡聖界地章』には「京青龍寺沙門良賁集」とあるが、註6の内題・外題同様に後世付帯の可能性もある。その際は『仁王経疏』冒頭の「青龍寺翻經講論沙門」（正蔵三三、四二九a）か『貞元録』の「翻經大徳青龍寺主沙門良賁筆受兼潤文」（正蔵五五、八八四c）を参照したと思われる。
- (19) 前註『貞元録』に「寺主」とある。これは貞元十六年（八〇〇）の編著なので、『仁王経』訳経当時の役職かどうか不明。ただ訳経当時の所属寺院を青龍寺とする点は採用したい。
- (20) 『表制集』卷一「請再訳仁王経制書一首」（正蔵五二、八三一bc）
- (21) 完成日を「十五日」とし、承明殿灌頂道場にて進上したことを明示するのは良賁疏「遂 詔観軍容使開府魚朝恩。兼統其事於南桃園翻訳。起自月朔終乎月望（一日～一五日の意）。於承明殿灌頂道場。御執旧経対読新本」（正蔵三三、四三〇c）である。この記述は申請した二日より一日早く作業が始まっていたことを示すが、実際にそうだったのか、あるいは良賁の修飾か不明。
- (22) 「新訳」代宋御製序（正蔵八、八三四b）。『全唐文』卷四八にも所収。
- (23) 『続開元録』『貞元録』は、良賁疏や「新訳」代宋御製序の後に成立したものである。その意味では二次史料である。
- (24) 正蔵五五、八八四c～五a。本朝法隆寺蔵の不空訳『仁王経』（平安末期写）の巻末には、これよりやや詳しく

く訳場人事が付されており、既に友永植氏によって研究がなされている。同氏「不空訳『仁王護国般若波羅蜜多經』小考」(『別府大学紀要』三五) 参照。なお本稿は友永氏論文に拠るところ大である。

- (25) 訳場の九位の序列について、鎌田茂雄博士によれば「筆受」は「訳主」に次いで二番目に重要で、「潤文」は訳した漢文の修飾などで五番目とする(『中国仏教史』六、第三章一節)。一方増谷文雄博士は「潤文」が「訳主」に次いで二番目に重要とする(『仏教經典の翻訳』『増谷文雄著作集』一)。どちらにしても重要な役割であることに変わりはない。この場合法崇が「證梵本義」としていわば副訳主であったため、円照が良責を三番目にしたのであろう。

- (26) 註21の良責疏で「兼統其事」とするのが初出。『宋高僧伝』では「監護」とする(正蔵五〇、七三五b)。「監護」は訳経上の役職であり、友永氏前掲論文によると「訳経事業の統括・運営」ではないかとのこと。筆者も異論が無い。

- (27) 近年飛錫については「唐中期仏教思想研究会」(大正大学総合佛教研究所) によって研究が進められている(『大正大学総合佛教研究所年報』二三以降)。訳経参加が即不空の弟子としない好例である。

- (28) 正蔵一六、七四七c。『全唐文』巻四八にも所収。

- (29) 『大聖文殊師利菩薩讚仏法身礼』序に「于時大唐永泰元年維夏四月也」とある(正蔵二〇、九三六c)。

- (30) 正蔵二〇、九三六c

- (31) 友永氏前掲論文参照。僕固懷恩は元官軍であったが、魚朝恩らの計略で叛じたといういきさつがある。

- (32) 哥舒翰、李元琮については藤善真澄「不空教団の展開」(鎌田茂雄博士還暦記念論集『中国の仏教と文化』) が詳しい。

- (33) 山崎宏『隋唐仏教史の研究』第十三章二四五頁、同「安史の乱と仏教界」(『立正史学』三二)、頼富本宏博士『中国密教の研究』一七八頁、中村氏前掲論文三八六頁など。管見ではこれに最初に疑問を呈したのは友永氏

良賁の生涯及び不空三蔵との関係について（山口）

前掲論文である。

- (34) 多賀秋五郎『唐代教育史の研究』、築山治三郎「安史の乱後の政治と官僚の対立抗争」（京都府立大学学術報告『人文』一九）、鈴木正弘「元載政権と士人層」（『立正史学』八三）等参照。
- (35) 『続開元録』（正蔵五五、七五一b c）。百法師百講読は旧訳・新訳共に説く（正蔵八、八三〇a・八四〇a）。
- (36) 『表制集』巻一（正蔵五二、八三〇b）。ここに見える僧の全てが不空の弟子とは言えない。
- (37) 『続開元録』（正蔵五五、七五一c―二abc）。『貞元録』は結願が二十三日（同八八五c―六c）。他に『旧唐書』一一、『冊府元龜』巻五二、二左右。『資治通鑑』巻二三三、など。この法要については北尾隆心「『大乘密嚴經』について（二）——不空三蔵における『密嚴經』——」（『智山学報』三五《四九》）が詳しい。
- (38) 『続開元録』（正蔵五五、七五二b）
- (39) 友永氏前掲論文ではこの記述から当時の良賁を資聖寺僧として扱う。たしかに良賁が自身を「青龍寺僧」とするのは『凡聖界地章』と大暦元年（七六六）の『仁王經疏』であり、『凡聖界地章』の記述は註6、註18のようになおも検討を要している。さらに註42の『続開元録』によれば百座法要落慶に合わせて資聖寺に新講堂が建立されており、その題額は代宋の筆によるなど、良賁が資聖寺僧であったからの厚遇かとも思える。西明寺にはそのような厚遇は無い。ここから『仁王經疏』以降は青龍寺僧であることが確実だが、それ以前は資聖寺僧であった可能性も捨てきれない。本稿では一応暫定的に、『貞元録』で「青龍寺主沙門良賁」とすることと『凡聖界地章』の記述を採用し、「寺主」はともかく訳経当時は青龍寺所屬として扱っておく。
- (40) 鎌田茂雄博士は資聖寺での法要再開が不空に命じられたとするが、所引の『旧唐書』（巻一一、代宋）にそのような文言は見当たらない（同博士『中国仏教史』五、一〇五頁）。また『仏祖統紀』四一には「詔不空三蔵置百高座講經」（正蔵四九、三七七c）とあるが宋代の史料である。
- (41) 『表制集』巻一（正蔵五二、八三一ab）

(42) 正蔵五五、七五二c―三a。『貞元録』もほぼ同じ（正蔵五五、八八六c）。また弘法大師は『広付法伝』で不空が百座法要に参加したようにこの箇所を略抄引用している（弘全一、二四）。これは註44の『行状』をも参照しているからと考えられる。

(43) 『表制集』巻一（正蔵五二、八三二b―三a）

(44) 『不空三蔵行状』（正蔵五〇、二九三b）。弟子ではないが、飛錫もこれについて『碑』に「或翻密嚴・護国之梵文。雲飛五色」（正蔵五二、八四九a）とし、詳しく触れない。

(45) 良賁疏「沙門良賁言伏奉今年二月十一日。恩命令在內於南桃園修撰新訳仁王般若經疏。微僧寡学懼不称。：陛下意謹以今月八日繕写畢功文過万言部有三卷施行竊慚於愚見裁成異於聖恩并陀羅尼念誦軌儀一卷。承明殿講密嚴經対御記一卷。今並同進輕塵玄鑒祇畏無任謹奉表陳進以聞沙門良賁誠歡誠懼謹言永泰二年十一月八日奉詔内修疏沙門良賁上表」（正蔵三三、五二三ab）。元代の『仏祖歴代通歳』一四では、代宋が良賁疏に感動して元号を大暦に改めたとする（正蔵四九、六〇〇a）。

(46) 『仁王陀羅尼念誦儀軌』（正蔵一九、五二三c）

(47) 大村西崖『密教發達志』四、六三三頁。今井氏前掲論文、長部和雄氏（『唐代密教史雜考』九二頁）、田中正保氏（『不空所伝の金剛頂瑜伽經について』『印仏研』三九―一）らもこれを踏襲する。

(48) 『仁王陀羅尼念誦儀軌』（正蔵一九、五一四a）。向井隆健氏はこの儀軌に不空の典型的な「撰述的」要素があるとする（『不空の教学研究のための資料考』『豊山学报』二五）。

(49) 正蔵三三、五一六b・五一九c。田中氏前掲論文の指摘による。

(50) 諸宗章疏録三に銘記。不空訳『密嚴經』の代宋御製序は、代宋が「西方有聖人」（正蔵一六、七四七b）に『密嚴經』を講説されたという内容から始まっており、『承明殿講密嚴經対御記』との関連が連想される。

(51) 『旧唐書』一八四、魚朝恩伝。『唐会要』卷四八。『冊府元龜』卷五二と『長安志』卷一〇の記述は年次に若干

良賁の生涯及び不空三蔵との関係について（山口）

の違いがある。

(52) 『続開元録』「属章敬寺梵宇初成。執疏伏膺。常数百衆。雖紙貴如玉無以如焉」（正蔵五五、七五八c）。『宋高僧伝』にもこれを受けた記述がある（正蔵五〇、七三五c）。

(53) 『続開元録』「或在安国伽藍数揚亦爾。皆官給飲食以供聽徒。数年之間帰者如市」（正蔵五五、七五八c）。『宋高僧伝』にもこれを受けた記述がある（正蔵五〇、七三五c）。また『宋高僧伝』の「唐京師安国寺良賁伝」という標題は、この時代の良賁が華々しかったことを示したものであるうか（同七三五a）。

(54) 例えば子翺（正蔵五二、八三五c）、恵林（同八三八a）、超悟（同八四〇c）、元盈・道液（同八四二a）など。章敬寺の僧が不空を通して開講するのは、魚朝恩の死後である。また青龍寺に曇貞、恵果が入寺するのも同様である。

(55) 『旧唐書』一八四、『新唐書』二〇七、各魚朝恩伝。

(56) 『続開元録』「法師昔大曆六年徙居集州。教授伝経不遑寧止」（正蔵五五、七五八c）。『宋高僧伝』も内容が同じだが、編者がこれを「末塗淪躓（晩年に落ち、つまづいた）」と評している（正蔵五〇、七三五c）。

(57) 『毘沙門儀軌』（正蔵二二、二二八c）

(58) 頼富博士前掲書四章一節一五二頁、他にこの儀軌について詳細なのは長部氏前掲書一五七―八頁。

(59) 「護国品第五」の文（正蔵八、八四〇b）。

(60) 良賁疏（正蔵三三、四九〇ab）。大黒天については彌永信美氏の『大黒天変相』が詳しい。

(61) 『表制集』巻三（正蔵五二、八四〇a）

(62) 正蔵五五、七五八c

(63) 長部和雄『表制集』解題（『国訳一切経』和漢撰述護教部五、四七五頁）。

(64) 円照に先んじて入蔵の際に外されていた可能性もあるが、その傍証は無い。良賁左遷後にそれを実行する勢

力の存在も疑問。

- (65) 正蔵五五、七五八^c。『宋高僧伝』では火葬して舍利百粒を得たと挿入している（正蔵五〇、七三五^c）。
- (66) 『宋高僧伝』では、両書を良賁の遺言によって重進した、と判断している（正蔵五〇、七三五^c）。
- (67) 上卷五丁左
- (68) 正蔵八、八三二^b
- (69) 正蔵八、八四三^a
- (70) 正蔵三三、五一三^b
- (71) 『仁王陀羅尼念誦儀軌』（正蔵一九、五一四^a）
- (72) 正蔵八、八二七^b
- (73) 上卷四一丁右
- (74) 正蔵八、八三七^b
- (75) 正蔵三三、四七二^{b c}
- (76) 吉蔵疏（正蔵三三、三三二^c）と伝天台疏（同二七三^c四^a）でも「十住十行十迴向」「金輪」になっている。不空がこれらに精通していたのではなく、良賁がこれらの記述を受け、「新訳」に反映させたと思われる。訳経に参加した他の僧の教学も反映しているだろうが、本稿では『凡聖界地章』の記述から良賁と確認できるもののみを挙げた。
- (77) 「新訳」と「旧訳」の顕著な相違点が四つあるが（頼富博士前掲書一七二頁）、そのうちの一つに不思議品（旧訳散華品）に『華嚴経』の十地説を導入したという点がある。これにも良賁の教学が色濃く感じられる。
- (78) 正蔵八、八三七^a
- (79) 上卷四五丁右

良賁の生涯及び不空三蔵との関係について（山口）

- (80) 上巻四七丁右
 - (81) 『八十華嚴』卷三四（正蔵一〇、一八一b）
 - (82) 正蔵八、八三七a
 - (83) 武内紹晃博士「円測の「仁王経疏」をめぐる諸問題―良賁との対比を中心として―」（『龍谷大学佛教文化研究所紀要』一三）、同「円測と良賁の仁王経疏における唯識説」（『宗教研究』二二八）、平井氏前掲論文など。
 - (84) 正蔵三三・四九〇ab、同四九六c、同五一五c、同五一七a。全て「三蔵所持梵本金剛頂瑜伽経云」とする。
 - (85) 『表制集』卷三（正蔵五二、八四〇b）
 - (86) 『続開元録』「翻經大徳潜真。親奉三蔵和上示以秘教。入曼荼羅。登灌頂壇。受成仏印。仰諮密要」（正蔵五五、七六〇a）。また潜真は大暦六年（七七二）の『大虚空蔵経』の訳に参加し、その疏も著している（『貞元録』、同八八七c、八八a）。
- 【キーワード】 良賁、凡聖界地章、不空、仁王経疏、訳経